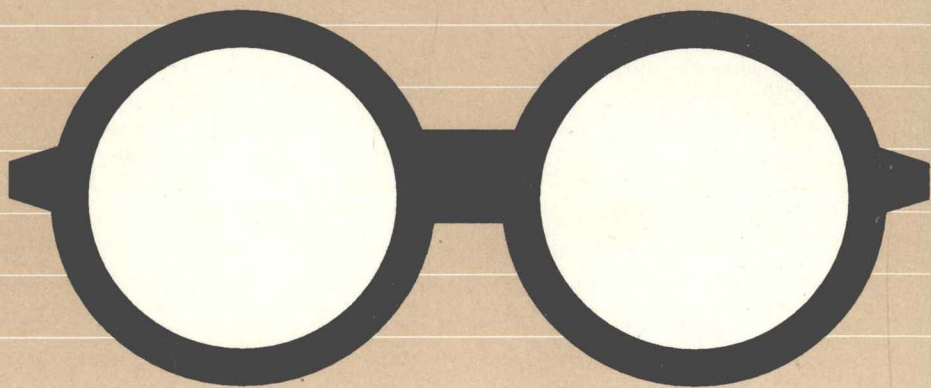


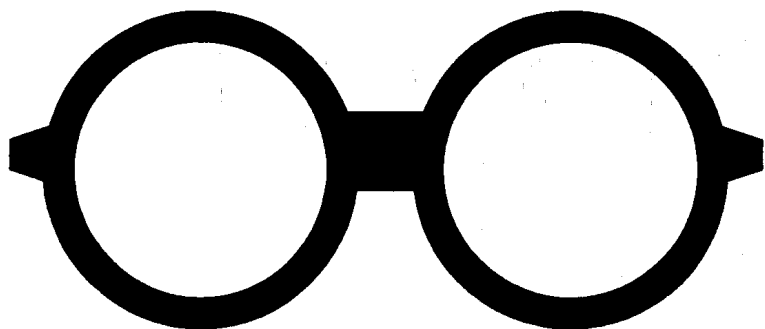
大江健三郎論

桑原文和



大江健三郎論

桑原文和



桑原丈和（くわばら・たけかず）

1965年 北海道帯広市に生まれる。

北海道大学文学部に進み、同博士後期課程単位取得退学。94年から北海道大学助手（日本文化論）。

mail-address:BYW01317@niftyserve.or.jp

大江健三郎論

1997年4月30日 第1版第1刷発行 Printed in Japan

著 者 桑 原 丈 和

© 1997年

発 行 者 畠 山 滋

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 有限会社東 明 製 本

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都文京区本郷 2-11-3

電話 03 (3812) 3131~5 番

振替 00190-3-84160 番

郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-380-97246-1

大江健三郎論

目次

I

大江健三郎はどのように論じられてきたか 7

大江健三郎の小説の書き方 19

II

〈私〉を書くこと——〈戦後派文学〉の継承—— 37

小説と〈私〉——『レイシ・ツリ雨の木』を聴く女たち—— 61

家庭・〈われわれ〉・民主主義——『新しい人よ眼ざめよ』—— 89

小説の教育は可能か——『キルプの軍団』・『静かな生活』他—— 114

Ⅲ

蜜三郎の言葉と眼

——「万延元年のフットボール」に関する一視角——
137

「万延元年のフットボール」と一揆の物語

——「夢のような昔の話」が持つ意味——
158

「個人的な体験」論
180

「青年の汚名」論
209

「芽むしり仔撃ち」論
226

書誌
248

あとがき
257

凡例

一、引用文の仮名づかいは、一部を除いてすべて新仮名づかに改めた。

一、引用文および雑誌名の旧字はすべて新字に直し、促音・撥音はすべて小文字に統一した。ただし、人名に関しては、旧字を用いたものもある。

一、年月日はすべて西暦に統一した。

一、引用中の傍点・ルビなどは、特に記さない限りすべて原文によるものである。

一、引用中の明らかに誤植と思われるものについては、引用の際に訂正した。

一、引用・言及に際しては次の順で書誌に関して記した。

題名（『』で囲む）、雑誌名または単行本名（『』で囲む）、出版社名、発行・刊行年
ただし、雑誌に関しては発行月も、新聞に関しては発行月日も記した。

一、大江健三郎の小説・エッセイ・座談会・対談の詳細については、本書の最後にまとめて記し、本文中では発表年のみを記した。ただし、以下の場合には本文中に記した。

・加筆などにより複数の本文があるもので、他の箇所とは依拠したテキストが違う場合。
・発表した月日まで本文中であげる必要があると判断する場合。

一、大江健三郎が関わったものの以外の引用の詳細は、本文中に記した。

大江健三郎はどのように論じられてきたか

1

文芸雑誌・新聞などに新しい小説の書評が載る一方、今までの仕事を代表するものとして既に一定の評価を与えられている過去の小説に関する論文が研究誌に発表される。小説の発表を止めている現在はいくらか事情が違ってきたが、大江健三郎の小説についての批評の現状はこのようなものである。言及する対象・書き手・書き方・発表の媒体・読み手などはそれぞれ異なるものの、この二通りの批評は一定の大江健三郎についてのイメージにもとづいて書かれている。一九六〇年代・七〇年代から続いている戦後文学の後継者、戦後民主主義、政治と性、想像力、核時代の危機などに加えて、最近では文学（小説）の方法化、樹木・森と救済、障害のある息子との共生などといったイメージが、大江健三郎という名前の周りを取りまいていく。

書評は本を売る・買うという現場に関わりながら書かれている。その役割のために従来イメージに乗り、それを強化するのに一役買ってしまうのはやむをえないことである。また、文学研究は

学校教育と連動しながら、日本文学における聖典^{カノン}を作り出すことを目的としている。社会現象や時代思潮を中心とした従来の文学史の記述の延長線上にあり、なおかつ明快でわかりやすい物語を再生産してしまうのも無理のないことである。

しかし、流通しているイメージに揺さぶりをかけ、読み手を新たな読みに導くことも批評の働きのはずであり、従来の多くの批評はその点を満たしていない。結局、それらは大江健三郎自らがエッセイなどを通して提示してきた枠組み——先程挙げたイメージがそれに当たる——の中で小説をとらえようとしてきたにすぎない。

もう一つ、大江健三郎の小説に対する批評の特徴として、その時代の批評の傾向を忠実に反映したものが書かれているということがある。これは、大江健三郎自身が登場以来常に第一線で小説を書き続けてきたためである。つまり、批評家としての自分の立場を決定する上での叩き台としての役割を大江健三郎という小説家が果たしてきたということである。そして、大江健三郎に関する批評の変遷は、日本文学研究においていまだに素朴に信じられているような、研究の積み重ねという状態にすらほど遠い。個々の批評がそれぞれの立場・方法で大江健三郎および彼の小説を論じている。一方で、パラダイムの転換というような劇的な事態が起こっている訳でもない。様々な方法論をめぐる論議があったものの、作家観・小説観・文学観・表現観に関して言えば、全体として大きな変化は起っていない。それゆえに、先程述べたようなイメージが有効であり続けているのである。

また、大江健三郎および彼の小説自体が、デビュー以来四十年近い時間の中で様々に変化し続けている。変化しない点もあるのだろうが、おそらくかなりの無理をしなければすべての大江健三郎の小説に共通する、独特な点を見出すことはできないだろう。また、そのような無理をして語られ

た一貫性など、一つ一つの小説の持っている面白さからすれば何の意味もない。

このように、大江健三郎についての従来の批評は、大江健三郎自身の言葉に寄り添い過ぎているか、書かれた時代のモードに忠実であり過ぎるかのどちらかだった。それでも、この後大江健三郎の小説について語っていく前に、これまでの批評のあり方を見ておくことで、本書が避けようとしたものを示しておきたい。

2

ここで従来の批評の一つ一つを追っていく余裕はもちろんない。かといってすべての批評を一括りにすることもできない。そこで、大まかに時期を分けて傾向の変化を追っていくことにする。時期区分は大江健三郎の活動によって決めているが、同時にできるだけ批評の変化と重ねられるようにした。

一九五七年から一九六〇年代前半

この時期は、大江健三郎はデビューしてまもなくであり、先程述べたような批評の叩き台の役割はまだ果たしていない。大江健三郎または彼の小説を単独で取り上げた批評はまだなく、他の小説家と共に、彼らと比較されながら論じられ、それまでの日本の小説とは一線を画した新しい小説という評価が与えられている。そして、特にその感覚・感受性の独特さに注目が向けられていた。その際「イメージ」という言葉がキーワードにされている（江藤淳¹・野間宏²・中田耕治³）。その見方と関係するが、小説の世界が日本の日常生活と切り離され、つくりものであり、寓話的であるとい

う見方もされている（加藤周一・中村真一郎・小田切秀雄⁽⁴⁾）。また、これらの評価の裏返しとして、「現実遊離派」という呼び方をするものもいた⁽⁵⁾。

また小説家としては、石原慎太郎や開高健と共に新しい世代を代表する小説家というレッテルを貼られていた。彼自身一九五〇年代の末から《若い日本の会》に参加したり、「われら民主主義の子ら⁽⁶⁾」とか「怒れる若者たち⁽⁷⁾」と題された座談会に出席したり、自らを新しい世代として位置づけるような行動を取っていた。この時期に年長の文学者たちと共に出席した他の座談会などでも、若い世代の代表として扱われていたし、その立場で発言している⁽⁸⁾。

そのような世代の代表としての評価と共に、世代を代表しているという態度に対する批判も行なわれている。例えば村松剛は、大江健三郎には「同世代の苦悩の体現者としての気どり⁽⁹⁾」があり、「われらの時代」（一九五九年）が彼自身の「現代の日常性につよい嫌悪をいだきながら、怒りをむける対象すら見失って空転せざるをえない焦燥感や閉塞感を、まざまざと反映している⁽¹⁰⁾」と語る。この傾向は特に「われらの時代」の発表後、強くなっていく（江藤淳⁽¹¹⁾・河上徹太郎⁽¹²⁾）。

以上の批評の受け方は、この時期の、またこの時期以降も含めた、大江健三郎に限定されない、小説家と小説との結びつけ方の傾向を明らかにしている。その一つは、小説を小説家本人の反映と見る傾向であり、もう一つは小説を時代の反映と見る傾向である。前者の場合、小説は小説家の思想や無意識や資質・体質の反映である。後者の場合、小説はその小説が書かれた時代の思想傾向や人々の願望や風潮・風俗の反映である。このような見方をする批評にとって、小説家の書くエッセイや座談会・対談での発言やインタビュー、それに知人・友人の証言などは重要な意味を持つ。また、その時代を特徴づけられる出来事や流行に関する雑誌・新聞などの記事や、社会調査の

結果や学者の分析なども同様である。

デビューまもなくの短篇に関して言えば、そこで語られた登場人物の感情・感覚や描かれた登場人物の見た風景の描写の仕方など、すべてが大江健三郎の感性の反映だと見なされた。例えば前章で触れた「われらの時代」に対する村松剛の批評などはその典型である。「作者」による主人公（南靖男）の「対象化」の不十分が批判の対象になっていたが、これは批評する側の先入観によるところが多い。次章で見るとおり、小説のストーリーにも注意すれば、「対象化」が不十分であるという批判は不適切であることがわかる。ところが、この時期の批評の態度として登場人物または語り手の発言・思考をそのまま小説の書き手に結びつける発想が取られているために、このような批判がなされたのである。

この後、一九六〇年代前半になると大江健三郎に対する言及がそれまでよりも少なくなる。デビューから数年経って特殊な新人扱いをしていた周りの反応も落ち着きを見せて来たということがある。また、一年に中短篇を十も発表していた一九五八年などとは違い、仕事の中心が「遅れてきた青年」（一九六〇―六二年）・「日常生活の冒険」（一九六三―六四年）といった連載長篇に移り、連載中の小説は批評の対象にはしないという不文律もあつて取り上げられる機会が減ったということもある。

その少ない言及の中で頻繁に用いられていたキーワードと呼べるものは、やはり「性」または「政治と性」である。これらの言葉自体は大江健三郎自身が「われらの時代」に対する否定的な評価に反論するために書いたいくつかのエッセイの中で用いているものである。それを批評する側がそのまま用いてしまっている。もともと、大江健三郎自身が自分の小説を批判し、レッテルを貼る批評

に對して、そのレツテルを積極的に引き受けて自分の小説の獨自性や新しさを強調するところもあつたので、すべてを批評の責任とすることもできない。

既に今まで述べてきた中に、大江健三郎に限らない、ある小説家を論じる上での批評の陥りやすい傾向は出て來ている。まず、小説家自身がエッセイなどで用いた言葉を批評する側がキーワードとして受け入れ、その言葉を出発点にするということがある。また、ある批評の中で感覺的に用いられた言葉が再検討されないままで受け継がれていくこともある。例えば、この時期の大江健三郎を語る時のキーワードは「世代」「性」や「感受性」「イメージ」である。前二つが大江健三郎自身の言葉であり、後の二つはいつのまにか決まり文句になつてしまつた言葉である。

もう一つ、小説家の書いた言葉を小説・エッセイといったジャンルを問わず、小説家自身の思想・感性を語るものと見る見方がある。小説のある登場人物の思考・言動をそのまま小説家自身に結びつけるのはもちろん素朴すぎる。また、たとえエッセイであつてもそれが発表された時期・媒体などといった条件を検討せず、鵜呑みにするのも危険なことである。ところが、そのようなとらえ方がこの時期から現在にいたるまで続いているのである。

一九六〇年代後半から一九七〇年代前半

一九六四年の「個人的な体験」、さらに一九六七年の「万延元年のフットボール」の發表後、大江健三郎についての批評は再び活気づく。さらに一九六五年の『嚴肅な綱渡り 全エッセイ集』および一九六六年の『大江健三郎全作品』全6巻の刊行により、それまでの大江健三郎の小説・エッセイの全体を一度に読めるようになり、まとまつた大江健三郎論が發表されるようになる。大江健

三郎を単独で扱った批評が現れ始める⁽¹⁵⁾し、大江健三郎を論じたものが批評の新人賞を受賞するようになる⁽¹⁶⁾。最初に大江健三郎を論じた単行本である松原新一の『大江健三郎の世界』⁽¹⁷⁾の刊行もこの時期であるし、商業研究誌でも大江健三郎の特集が組まれるようになる⁽¹⁸⁾。

大江健三郎を離れて、この時期の批評の状況の特徴となるのは、学生運動を中心とする政治運動を意識して書かれていることと、〈内向の世代〉が登場したことである。〈内向の世代〉そのものと彼らに対する評価の間にはずれがあるのだが、そのレッテルのもとに囲いこまれた小説家・批評家たちは、政治運動とは対極の位置にいるものと見なされていた。そして、大江健三郎はこの両者のどちらとも距離を置いた位置にいると見なされており、当然それらを評価する立場からの批判を受けることになった。例えば前者の立場から大江健三郎を批判したのは宮内豊であり、後者の立場から批判したのは柄谷行人である⁽²⁰⁾。ただ、〈内向の世代〉の一員と見なされていた秋山駿自身は、大江健三郎の小説を「自分自身に対して」「異物感を抱」⁽²¹⁾いている点から、つまりまさにその〈内向〉性から評価している。

また、この時期（およびこれ以降の時期）の批評の一つの形を代表するのが、磯田光一のものである⁽²²⁾。小説の表現・小説に描かれている出来事から、その時代の精神的・思想的な風潮などの変化を読み取るうとするその方法は、後発の批評にも受けつがれている⁽²³⁾。この批評は小説を大きな問題へと結びつけることができるが、逆に小説全体を読み直すと取り出したその部分に関する読みが的外れになっていることも多い。

この磯田光一も含めて、この時期の批評のキーワードは「政治と文学」の関係である。これは「実践と理論」「政治活動家と文学者」という、戦前からのマルクス主義に依拠する批評から継続して

いた対立に敷衍することができる。大江健三郎の場合政治・社会的な発言が多いために、他の小説家よりも矢面に立たされることが多かった。この時期が（最近のノーベル賞前後の報道を除けば）大江健三郎が盛んに批評の対象になった最後の時期である。

一九七〇年代後半

この時期になると、それまでに作り出されてきた大江健三郎にまつわるレッテルが強固なものとなり、批評の傾向に特に大きな変化が生じることはなくなる。また、大江健三郎の占める位置も固まってきており、この時期に登場してきた新しい小説家たちのかげに隠れるようになる。文芸時評や書評という形での扱いはあるものの、文芸雑誌の批評で単独で扱われるようなことは少なくなる。一方で『小説の方法』（一九七八年）の出版、その中で展開された方法の実践と見なされた「ピンチランナー調書」（一九七六年）や「同時代ゲーム」（一九七九年）により「方法的な作家」という新たなレッテルが付加されていく。「構造主義」・「中心と周縁」・「ロシア・フォルマリズム」・「トリックスター」などの、大江健三郎自身がたびたび用いていた言葉が、そのレッテルのまわりにまわりついている。

この時期の批評は「方法的」であることの是非に集中している。大江健三郎の語る「方法」が小説を書く上で必要なのか、またそのような「方法」を用いることがはたして有効なのか。「ピンチランナー調書」と「同時代ゲーム」の小説としての評価もその点に関わっている。「方法」に否定的な立場を取る批評にも、二通りの態度がある。まず、構造主義そのものを批判している、特にマルクス主義の批評からのもの、それに大江健三郎の構造主義の理解および文学・小説に対する適合